

Follow up

—会長の時間—

会長職の役割分担を担います東野です。何卒、宜しくお願い致します。今後、会長の時間での不十分さをフォローできればと毎回1枚程度の補足文を掲載して参ります。初回の就任ご挨拶卓話のみ、RI、地区、クラブの方針と計画を中心に4枚になりました。ご寛容願います。

まずRI会長ホルガー・クナーク氏（ドイツ、ヘルツォークトゥム・ラウエンブルク・メルン・ロータリークラブ所属）ですが、当初ノミニーだった方が健康上の理由でノミニーを辞任してしまい、再度会長ノミニーの選考を行い、対抗候補も出ずこのクナーク氏が昨年5月に正式にノミニーとなり本7月よりRI会長となりました。ドイツから初めてのRI会長です。3色の扉のテーマロゴは、ロイヤルブルーとゴールドがロータリーカラーで左のピンクはローターアクトの色だそうであります。

クナーク会長の今年度テーマは、「ロータリーは機会の扉を開く」です。ロータリーとは、クラブに入会するというだけでなく、「無限の機会への招待」だと強調します。奉仕プロジェクトを通じ会員自身や受益者の人生をより豊かにする為の道を開くのがロータリーだと力説し、「奉仕の行いは、その大小にかかわらず、助けを必要とする人達の為に機会を生み出すものと、私たちは信じている」とも述べておられます。また、ロータリーはリーダーシップの機会、奉仕のアイデアを実行に移すために世界を旅する機会、そして生涯続く友情の絆を築く機会を与えてくれると続けました。

RI 会長今年度テーマは、「ロータリーは機会の扉を開く」であります。

そして地区は、藤井秀香ガバナーがスローガンとして「ロータリーと共に寄り添い奉仕の扉を開こう」お陰様に感謝し、救いを求める声に寄り添い、ロータリーと共に奉仕しよう。と掲げておられます。

我がクラブの今年度テーマと計画ですが、実は昨年12月に下案を書いていたのをこのコロナ禍で全面書き換え、更に6月半ば70周年記念行事も中止が決定され、更なる修正のやむなきに至りました。各委員長様には事情が事情とは申せ、大変ご迷惑をおかけしました。あらためてお詫び申し上げます。

そしてその結果、テーマを

1、With コロナ、After コロナで先ずは動き出す

2、70年の歴史を尊び、100年への実りを目指し、凜(りん)として嬉々(きき)として
とさせて頂きました。

活動方針には、現下の情勢（COVID-19下）に鑑み、一に、それでもロータリーやっぱりロータリーの意を強くできるクラブ運営を構築し、その上で二に、70周年の伝統、歴

史、実績に相応しいクラブ運営に努め、どのような変化にも凜とした活動を心掛け、次に参加のインセンティブや喜びとなるよう嬉々としたクラブライフをめざしたいと方針に書かせて頂いた次第です。

活動計画は、クナーク会長のキーワード“扉”を活かし、 **With コロナ、After コロナへの工夫を成しつつ、7つの扉を開く事**としました。

1に大変な事があり、困難な時だからこそロータリーの扉を積極的に開く、そうでなければロータリーの存在意義が問われます。今回のコロナでエッセンシャルワークと言う言葉が多用されました。正しくロータリーを、堺クラブを、エッセンシャルな機会にしなければならぬと思います。リモートを強く奨励され、我々の生命すらも危うくしかねないこのコロナ禍、それでもこうして集うロータリーの中に、工夫に工夫を重ね、守るべきは守り、でも変化も拒まず、ロータリーでなければ、ロータリーだからこそ成しえる成果を、社会に、仲間に、そして自分に与えられる、その幸せを求めて参りたいと思います。

2に70周年メモリアルイヤーである事を次の10年と新たな時代への扉にする（次の10年やWith コロナ、After コロナ等の新環境に向け役立つ工夫や見直しを行う）

経験値と言うのはしばしば大変尊いもので、未知の壁にぶち当たった時、経験値の少ないものはマニュアルが無いとしばしば狼狽たえます。でも先輩諸氏は、過去の経験に照らし、未知なるものへの対処を類推し編み出されます。他方、その経験値ですら乗り越え難い壁もあり得ることも否定し難い事実です。壁は沢山あるし、これからも出続けます。70年の経験値を受け継ぎ活かしつつ、変わる事も拒まず具体的な活動に落とし込んで参りたいと考えます。ヴィスコンティの映画山猫のセリフ「変らずに生きてゆくためには、自ら変らねばならない」これをも胸に今年歩みたいと思います。

3、ロータリーを学び楽しむことがロータリーライフ充実への扉にする（ロータリーの基礎情報やRI動向を会員全体で共有する機会を増やす）

RIがすべて正しいなどとはゆめゆめ思っていません。それでもなるほど世界中の英知が集まって組み立てだけの組織であり制度だなどと思う事も多々あります。礼賛はもちろん、批判するにせよ、異論を立てるにせよ、とりあえず何を言っているのか、その背景は何なのか考えてみなくてはならないと思います。そしてそうした思考の組み立てには、道具すなわち基礎知識が最低限備わっていないと単なる引かれ者の小唄、負け惜しみに過ぎなくなります。逆にそうした基礎知識やトレンド、現在の知恵を手元に引き寄せますと、いろんな場面で脳科学言う所の「アハ体験」もでき、ロータリー以外の生活で生かすこともでき、結果としてロータリーを楽しんだ事となり、ひいてはリア充、リアル（現実）の生活が充実する事となると思う訳です。

4、増強こそクラブ強化への扉と認識し行動する（増強に役立ちそうな工夫はどんな事からもトライし、全会員課題とする）

ロータリーで散々交わされてきた“量か質か”、私は量の向こうに質は見えるが、質の向こうに量は見えないと思います。まして入会には我々仲間二人の推薦が必要な訳で、選ばれし二人が推薦するその人の質に問題があろうはずもなく、その確率、質が問題となる確率は気が遠くなるほど少ないと思います。思い切って皆で動いて参りたいと思います。

ロータリーの会員になる事は、ロータリーに借りを作る事、そしてロータリアンになる事はその借りを返すこと、そう考えて今まで増強に非力ながら努めて参りました。ここを共感頂けることを切に切に望みます。

5、多様な例会をロータリーライフ実感の扉にする（例会運営を従来の形にこだわらず、めりはりをつけ、“見やすく聞きやすく興味深く”をめざす）

そしてここがこのコロナ禍、最も問われます。不要不急という事が多用されました。見ようによっては、あるいは RC を知らない人がこの場を見た時に、不要不急に見えるかもしれません。しかし、自らを鍛え、友を得、共に支え、社会に還元し、それをムーブメントにするには、必要不可欠なのは、ロータリーです。そして我々は、計画1で述べた様にロータリーをこそエッセンシャルだと見定めここにいます。そしてそのロータリーに取って例会はまさにエッセンシャル以外の何物でもありません。他方、海外情勢も収まらず、第2波第3波の警戒も解けない、冬場に向かってはインフルエンザとのWパンチも恐れられています。こんな中、例会組み立ては至難の業だと思います。だけれども、フランスの哲学者アランに習い、悲観は気分、楽観は意思だという事を体現したいと思います。意思さえあればあらゆる工夫とツールを駆使して、ロータリーライフを実感できる例会が作れるはずだと思います。いやそうして作ってまさにエッセンシャルにしなければならないと思います、5に掲げました。

6、現下のパンデミック等社会的危機に貢献できる奉仕を実行する

いつかやった事、毎年やっている事を繰り返すのは楽な事です。でもそれで良いのでしょうか？未知の事、未経験の事を、まして人様の為に行うことは、しばしば大変で、苦しいです。でもそれ以上に、もし仮にそれを求めている人がいるならばその苦しみを受け入れて進まねばならないと思いますし、それが我々を、クラブを、ロータリーを成長させてくれるのではないのでしょうか。これが正しいとすれば、今必要とされている事を今行う、それは正しくこのコロナ下で苦しんでおられる、困っておられるところ、しかも中々一般の目線が行きにくいところに堺クラブの奉仕の力を注ぎたいと考えています。既に阪之上元会長、畑崎現社会奉仕委員長とご相談しつつ、奥中幹事が模索して下さっています。具体像が見えて参りましたら皆さんのお力で、今必要なところに必要な奉仕を届けたいと思います。

7、ホームページこそ社会への扉とする（自クラブ内のみならず外部にも積極的且つアップデートに堺 RC を発信する）

最後は、一見テクニカルな話に見えますが実は、コロナ禍だからこそ大変意味を見出ししており当クラブに取り大きな変化をもたらしてくれるカタリスト触媒となると考えます。単純なテクニカルな意味でも、この3月から6月にかけて現に体験されたはずで、当時、他クラブでは、HPで現状と今後をクラブ内外に刻々と発信告知していました。当クラブはどうだったでしょうか？ここが変わるとネット環境にあれば、あるいはスマホを出せば、即今後の重要告知が判ります。ついでに他クラブの事情をリサーチできます。これだけでも意味はあるのですが、実はこのネットであるいはスマホでクラブ事情を確認する行動、それ自体が今起きつつあるパンデミック後のパラダイムシフトへの我がクラブの一つのカギとなると思います。たかがどこかと無線でつながっているPCと言う箱、あるいは薄いポケットに入る電話じゃないか、でもわたしは、確信している事があります。人は中身に応じて箱があると思いがちですが、非常にしばしば箱に応じた中身ができるものです。きっちりした箱をこしらえ、そしてそれに入ると、おのずとその中身に磨きがかかり、箱に相応しい中身となる。こういうケース、少なくないと思います。独の社会学者カールマンハイムは、これを（Seinsverbundenheit）存在被拘束性と名付けました。あたかも今回、ハンコ文化の無駄さを強く意識させられ、電子証明の急速な一般化が進みそうですが、ハンコと言う箱を電子証明と言う箱に入れ直す、その先に働き方や、契約概念と言う中身も変わっていく。あるいは経産省が我々企業に突き付け始めていたDXデジタルトランスフォーメーションも箱を、道具立てを変えろと求めています。結局おのずと、このコロナで2～3年は早まりましょうが、結果、製品が、調達が、組織が、会社の哲学迄も、はい！そう、中身が加速度的に別次元へと変わっていく事となりそうです。これらと類似の事が、ロータリーに我がクラブに起こってこない訳がないと考えます。

社会の中心にジェネレーションZ、すなわちデジタルネイティブ、物心ついた時から家庭にも学校にもPCがあってネットに繋がり、長じてはSNSを駆使し、ITリテラシーが極めて高い、そんな社会人が活躍してきている以上、彼らを迎え入れていかずに済む訳がない。こう考えると、その入り口がクラブHPであると位置づけられる事に意味を見出せないでしょうか？もちろん、これからコンテンツは皆さんと共に更に更に充実させていかねばなりません。幸いこの立役者に奥中幹事が居て下さいます。

のっけから偉そうな事を並べてしまいました。まさに羊頭狗肉、羊の頭を看板にかけながら、実際は犬の肉を売る事になるかもしれません。ただ手間暇時間を惜しまず懸命に努力精進を積み重ねての1年にする所存なれば、会員皆様のお力添え、ご薫陶を切に切にお願い申し上げます、本年の方針計画のご説明とさせていただきます。

2020年7月2日第一例会卓話にて 東野裕暢